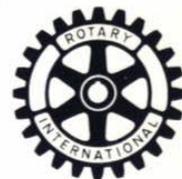


ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH WEEKLY



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：山田 安隆 幹事：大村 精二

会報委員長：清水 忠

1974・6月6日

第17号

禅とヨーロッパ



ヨーロッパ禅協会会長 弟子丸泰仙師

鈴木大拙は、西田幾多郎と共に石川県が産んだ偉大な哲学者の一人である。その大拙が、かつてアメリカに禅の教えを普及したと同じように、私も又戦後のヨーロッパで同じ努力を試みている。

今、禅の訓えは燎原の火のように西欧諸国に波及しつつある。

何故だろうか。それは西欧近代の物質文明の発展が、文化の荒廃と精神の疲弊をもたらし、東洋的無の精神に救済を求めたからにほかならない。

日本は、このすばらしい思想の母国である。しかし、現代の日本人は、この思想を忘れてはいないだろうか。

—金沢北RC例会卓話より—

(文責 清水 忠)



かなざわ文学散歩

—“人形のふるさと”—

卯辰山の山裾を、山に向って曲りくねった坂道を上ると、苔むした石段と山門の寺に辿りつく。真成寺である。

鬼子母神ともよばれるこの寺は、安産や子供の授かりを願って、日々に訪れる人が絶えない。

境内には、初代中村歌右衛門の墓や五十嵐道甫の碑と共に、人形塚がひっそりと建っている。花咲き匂う春四月には、こゝで人形供養会も開かれる。

—清水 忠—

私の名刺

釣見 栄一



俗に戦中派といわれる昭和6年に生れ、金沢第三中学に進学したが、終戦そして学区制の変更、六・三・三制度により現在の泉丘高校である一高に一年通学し卒業する年にもとの校舎である桜丘高校にもどるといった変動の激しい学生時代であった。卒業後、家業である葬祭業に就いたが、若い私には大変嫌な商売であった。しかし乍ら人生三大儀式の中で一生を飾る最後の仕事であり、亦公益性のある意義の深い職業である事を自覚しそれに専念する意を新にした。昭和45年2月1日、市内業者十二店舗の中より十店舗が経済、社会的に大きく変動するに際し、合理化と近代化を図る為に自己中心の経営から脱皮し企業の協業化による北陸葬祭協業組合を設立し年少者の私が代表理事に選ばれ、時代の要求に即応する様、奉仕の精神をもって事業の充実に努力を払っている。学生時代のクラブ活動はブラスバンドの一員として活躍し、黄金時代の野球部に声援を送りに出かけた私が、ふとしたことから長唄の魅力にひかれ20数年、今は亡き師匠の後を継ぎ杵屋一門の一つ柱として存続させ乍ら身をもって感じた事は、お互の協力があり譲り合う精神が大切であり、和をもって尊しの格言を深く経験した。職場にしろ邦楽界にしろロータリーの活動に最も必要である和こそ親睦に始る大きな原動力であると痛感しているものである。妻一枝（41才）長女京子（17才高3年）長男幸平（10才小5年）の家族構成。

若野 三郎



生れは金沢市尻垂坂、育ちは本多町、金沢二中、四高、金沢医大を出て、昭和12年軍医として中支那に従軍3年、四度負傷、武運に恵まれ何れも軽症、金賜勲章を戴きました。

昭和15年東京に帰り、軍病院耳鼻咽喉科の勤務医。昭和19年東京空襲で家財研究論文を焼失。恨み骨髓。終戦後郷里金沢へ帰り、国立金沢病院で3年、県外厚生病院で2年、昭和25年金沢東山に耳鼻科医院を開業して今日にいたりました。

菩提寺は山の上町善導寺。同寺に残る記録によると、先祖は若松屋と称し、木町即願寺裏に居住していたらしい。明治初年町人に苗字が許されるや、若野を名乗り、本多町に居を移し、土堀囲いの下級武家屋敷に住みついて幾世代。その血統が絶えたのを、父方の血縁の故を以って私が若野家を継ぎ、戦後現在の即願寺前に移ったのは、偶然とはいえ、因縁めいたものを感じています。

東京にも家があるので、現開業生活はしばしの仮住居とも考え、大学研究室通いや医師会活動に身を入れたり、診療所も留守勝ちのまま、徒らに馬齢を重ねて、鳥兎多々、気がついたら還暦でした。近頃漸く、東京は倅夫婦にまかせ、住みよい金沢に定住する事に決め、今回ロータリーにも加えて戴き、“奉仕の理想”の下に、私なりに懸命に余生を送りたいものと思っています。御交誼のほどお願いいたします。趣味、散歩、麻雀、小唄、剣道。

私の考えるロータリー (15)

ロータリー情報委員長 柴田 三郎

—金沢北RCのロータリー意識 (2)—

当クラブのロータリー意識のアンケートにおける会報について……全部読む23名、バラバラと読む11名、全く読まない2名の結果が出ている。而して次のような所見が付記されている。

「とても素晴らしい編集」「現状に満足している、今後マンネリ化しないよう期待する」「今の通り続けて欲しい」「今日のニュースがよい」「私の名刺はよい企画である」「私の考えるロータリーは勉強になる」などであり、そして「編集者の苦勞に深謝する」「毎週発行して欲しい」と、心温まる思やりの言葉と会報への期待が表明されている。事実、会報編集は大変な仕事であるが、創立間もないクラブとして、これだけの内容と出来栄は、誇り得るものであろう。会報の役割は大きい。清水委員長はじめ担当の皆さんに敬意を表すると共に、こうなったら当分は続けて担当して欲しいのが全会員の一致した願望であろう。清水さんの卓話の要約はすばらしく、ちょっと余人にはなし得ない卓抜さに、私は讃辞を惜しまない。

ロータリアン必読の書は“会報”、“ガバナー月信”、“ロータリーの友”の三つである。とりわけ会報は会員として、精読すべき義務があるといっても過言ではなかろう。隔週、しかも僅々4ページである。これらの文献は読まない、ロータリーの前進から遅れると強調したい。

“ガバナー月信”が一段と読書率の低いのは遺憾である。全部読む6名、バラバラが大半の22名読まないが8名となっているが、ガバナー月信はガバナーと会員の唯一なるパイプである。当クラブの三田良信さんがガバナーに代って編集の苦勞を重ねておられる。私もかつて岡田良介ガバナーの月信を担当したが、読んで欲しいと希って苦勞をも敢えて喜びとしたものであるが……。

“ロータリーの友”については、全部読む5名、バラバラ読む27名、読まない4名。この4名は月信の8名、会報の2名に共通しているのではなかろうか。“ロータリーの友”はロータリーの教科書である。ロータリー探求を一段と要請される新クラブとしては、今少しペースをアップして精読が願わしい。と、祈るや切。“ロータリーの友”で最も読まれているのは、当クラブでは“卓話の泉”、“友愛の広場”であり、“表紙がいい”と付記されたのが数人あった。雑誌委員のご配慮で、これらの文献の主要記事を例会において読んで聴いていただいて、読まない人々の関心を促しては如何であろうか。

会費について……は、適当が31名、いくらか知らないが1名、高いが3名である。この内高いと表現された3名は条件付きであって、必しもこだわっておらない。即ち、「当分これ以上あげないで」「会費はいいが、臨時支出が多い」などの要望である。「いくらか知らない」人のあるのもほほえましく羨やましい。ロータリーにも浪費がないとは言えないので、当事者は充分チェックが願わしくその上での将来の増額は当然あり得ることであろう。

クラブへの提言の中には「単なる社交の場に終らせないように」「会員相互がもっと腹をわって話合う機会がほしい」「順次、全会員による卓話を望む」「例会の前後に懇談の時間が欲しい」「金沢北RCのスローガンがほしい」などは極めて意欲的提案であり、いずれもぜひ実現して欲しい。と、私も共感を禁じ得ない。

